

「そうだ、あんぱんがいい！」

癌で入院中の友人Nに「見舞いに行くけど何か食べたいものはないか？」と問うと、彼は銀座の老舗の名を出してこう答えた。たかがあんぱんであっても、若い頃の我々にはたまにしか口にできない贅沢品。折節に食べたそのぱんには、餡だけでなく多くの思い出も詰っている。

Nは大腸癌の手術のわずか三カ月後、肺への転移で再入院していた。肺の三分の一を切除する手術は成功したが、本人はまた何処かに転移することをとても恐れていた。

病院に行く前、百貨店内にある売店に寄った。さすが銀座に本店を持つ老舗だけあって、あんぱん専用のギフトボックスが用意されている。たまたまアルバイトが一人しかおらず、慣れていない様子で、あんぱん十個をボックスに詰めるのに二十分あまりがかかった。

病院に着くと、Nは精一杯の笑顔で迎えてくれた。しばらく歓談し「さてそろそろいただきますか」ということに。特に食事の制限はないようだったが、あまり食欲はないらしい。それでもこのあんぱんは楽しみにしていたように「やっぱりつぶ餡に限るよね」と話しながら、「乾杯じゃなくて、乾ぱん！」とそれぞれのぱんを触れ合って口に運んだ。途端にNが怪訝な表情を浮かべる。私もその理由をすぐに察した。それは普通のあんぱんではなく、栗を使った変りあんぱんだった。あのアルバイトがあわてて別のものを包んでしまったのだろう。申し訳なさでいっぱいになる。

明るい顔をして、Nが口を開いた。

「俺はこれがお前と一緒に食べる最後になるかと思ってたけど、違うな。きっと、好物のつぶ餡は次回までお預けっていう、あんぱんの神様のお告げなんだよ。頑張って元気になれば、いくらでも食べられるんだからさ」

……そして一年後、転移が確認されていないNと再会し、乾ぱんして五個ずつあんぱんを食べた。お互い食べ過ぎのお腹を抱え、大笑い。目に滲んだ涙を笑いのせいにして。

案外、あんぱんの神様はいるのかもしれない。